

【一薬の魅力⑭西日本唯一の漢方薬学科く5>「時代が漢方に追いつきつつある」
新入生対象の本学独自科目「漢方・民間薬概論」】

2025/4/14 公開



新入生を対象にした「漢方・民間薬概論」が始まりました。漢方の概要や民間薬との違いなどを学ぶ本学独自の科目。最初は漢方について教える森永紀教授ら教員陣と学生らがそれぞれ自己紹介をしたりしました。

教室にはお菓子が用意されてほのぼのとした雰囲気。教員らは「西日本で漢方薬学科があるのは本学だけ」「漢方でもいろいろな分野の専門家がそろっているので質問してください」などと、次々にあいさつしました。

続いて学生らが自己紹介。「原因不明のアレルギーになりましたが、漢方薬によってすごくよくなりました」「『おばあちゃんの知恵』みたいな感じがして興味がありました」など、入学した理由はさまざまなようです。

その後、久保山友晴准教授が講義。医療の世界ではこれまで体のある部分が悪ければその部分だけを診察されてきましたが、今ではストレスが肌に影響することを考えたり、腸が悪ければ脳の状態も考えたりするなど、全身を考えるようになってきました。漢方ではもともと体全体を見て診察しており、「私に言わせてみれば、『時代が漢方に追いつきつつある』。漢方で昔から言われてきたことが最近、科学的に証明されつつあります。漢方は古いようで実はすごい」と、久保山准教授。

学生らは日本の民間薬についても学習し、センブリを“試食”。かけらにすぎませんでしたが、口に含んだ学生らは思わず苦そうな表情。「お、お菓子…」。学生たちは残っていたお菓子に手を伸ばしました。久保山准教授は「あ、そう。言うのを忘れていましたけど、この授業ではいろいろと味見をしますので、口直しの飲み物を持ってくるください」。お菓子を用意していたのはそのためだったのか？—なんていう、漢方の実習にありがちな「オチ」もしっかりあって、この日の講義は終わりました。